

***** 研究エッセイ *****

ゴジら退治からヒデら退治へ 節分の日思うこと 明文型日本語と生産性について

情報科学部地域情報科学科教授

奥田隆史

小中高生のころ作文を書くたびに、学校の先生、親に言われ続けたのはゴジら（誤字ら：誤字脱字，筆順，丁寧に）に注意することでした。ワープロのない手書きで文章を書く時代です，私の文章にはゴジらは頻発していました。ところが，大学時代の卒業論文執筆以降，長い文章はワープロソフトで作成するようになり，手書きで文章を書くことはなくなり，ゴジらという私にとり永遠の課題となったと思われる問題から，解放されました。ワープロソフトという技術に救われたのです。

明文：良いデザインの文章

現在，教育する側になった私は，ヒデらと命名した敵と戦っています。ヒデらとは“ヒどいデザインの文章(含む図表)”のことで，広い意味での明文[1]の対義語として使っています。明文とは，三省堂大辞林では“(1)文章にはっきり書き表すこと，また，その文章，(2)筋のとおった文。”とされています。つまり，情報（事実と意見）を他人に正しく伝えるための文章のことです。明文を書くことは良いデザインをすることに似ています[1][2]。職場で書くこともデ

ザインすることも他人の利益のためになされる行動です。独りよがりでわかりにくいデザインは，それを使う人を迷わせ，困らせ，最後にはそれを使うことをあきらめさせてしまいます。書くことも同じで，独りよがりでわかりにくい文書はそれを読んでいる人を迷わせ，困らせ，最後にはその人の時間をむだに使わせます。ヒデらが減るとストレスが減ると思います。

情報科学科教育と文章作成

ヒデらとの戦いについて以下に書きましょう。

私は愛知県立大学・情報科学部・情報科学科に属し，情報科学技術に関する教育研究をしています。具体的なテーマは，「情報通信システム(含むロボット)の設計・運用に必要な性能評価手法」，「情報科学技術を利用したサービス・サイエンスの研究」などです。ベースとなる基礎理論は，オペレーションズ・リサーチ(Operations Research, OR)になります。ORとは，企業経営や政策立案・施行など「運営(operation)」を行う際に生じる課題の背後から数理的モデルを抽出・解析し，解決策を提案する学際的な研

究分野です。

OR によって生み出された数多くの数理手法（シミュレーション，待ち行列理論，ゲーム理論など）は，姿形があるわけなので気づきづらいですが，汎用性が高く，金融，物流，サービス，情報技術などのあらゆる分野で利用され，現代社会の基盤を支えています。

私の研究室では待ち行列理論を利用することが多いです。研究室に配属される学生（学部，大学院）さんの研究テーマも待ち行列理論を利用するものになります。学期中，配属学生は，おのおのがそれぞれの研究テーマを設定し研究をしています。

他学部の皆さんは，情報系の研究室だから，学生さんは，コンピュータを駆使し，高度な数値計算をしたりロボットを制御したりしているのだろーと思われちゃうでしょう。もちろんです。しかし，一方で，情報科学やORの分野では，紙と鉛筆と頭と手で，新しいアイデアを考えなくてははいけません。とりわけ，待ち行列理論を理解し，新たなアイデアを創出するためには，当事者として混雑や行列を体験し，なおかつその様子を眺めることが重要になります。週末や長期休暇には，旅行やアルバイトをすることを奨励しているのは，体験や眺めることにつながるからです。配属学生は，創出アイデアを数値計算や制御実験により検証し，検証結果が卒論や修論の数値例となるわけです。

ところが，毎年，12月後半から2月前半の2ヶ月間，配属学生はコンピュータを計算や制御をするために利用するというよりは，文章作成やグラフ作成のためのアプリケーションソフトウェアを利用するために

使っています。学部4年生は卒業論文，修士2年生は修士論文の執筆があるからです。また，学会原稿の投稿締め切り前の約2週間にも，同じような使い方をしています。この2週間は最低でも年に3回はあります。

ヒデラ対策

この時期に指導学生から届く文章がヒデラです。ヒデラを倒すには丁寧に“赤”を入れる指導が必要になります。一般的に，情報系学生も含まれる理工系学生は「文章を書くことは苦手だ」と言います（実はプログラミングは，プログラム言語で文章を作ることなのですが）。私のこれまで指導してきた学生は全員がそうでした。

理系クラスの高校生は，「僕は数学や理科を勉強し，理工系大学へ進学したい」といいます。新入生の多くは，「僕は科学や技術の分野で生きていきたい」，「英語は話せるようになりたい」とはいいますが，誰も日本語による文章作成能力も磨きたいとは言いません。

指導の肝は，いかにして明文を書くことに意識を持っていくか，これが重要になります。そこで，私は，書くときにはいつも「読み手の利益になるように書くことを念頭に置くように」と指導しています。誰もが人に迷惑をかけるなど家庭や学校で躰けられていますから，現代の若者にも受け入れられています。

指導では，「君たちが研究発表に行くための旅費を得るためには，我々のやりたいことを，わかってもらえるように表現しなくてははいけない」，「将来，君がプロジェクトリーダーになった時には，プロジェクトの

重要性を上司に説明し、予算を確保しなくてはならない」、「日記、メモ、ブログなどとは違うのだ」などと言いながら、ヒデらの問題点を、説明をしています。

このように、上記の 2 ヶ月間と数回の 2 週間、私の仕事は OR 分野の研究指導をするというよりは、日本語明文指導をしています。明文は、文学作品の名文とは違うため、私でも指導が可能なのです。ただし、大学で明文を専攻したわけでもありません。義務教育から大学 3 年生まで、明文について講義で学習した経験はありません。卒業・修士・博士論文や学会投稿論文を書いたりする中で、身につけたことを指導しています。研究者として独り立ちし始めた頃から、自分自身も明文の名文を書きたい(特に英語で)という興味が芽生え、下記のような、村上春樹氏が翻訳技術を学習した方式で学習しました[3]。

“僕が勉強することに興味を覚えるようになったのは、所定の教育システムをなんとかやり過ごした後、いわゆる「社会人」になったからである。自分が興味を持つ領域のものごとを、自分に合ったペースで、自分の好きな方法で追究していくと、知識や技術が極めて効率よく身につくのだということがわかった。たとえば翻訳技術にしても、そのようにして自己流で、いわば身銭を切りながらひとつひとつ身につけてきた” (p. 55)。

プロフェッショナル・コミュニケーション・ソサイエティ

今では、明文を書くための方法論を研究

することも、研究の一部になり、IEEE(米国電気電子学会) の Professional Communication ソサエティのメンバーにもなりました。IEEE という電気電子情報系の学会でありながら、このソサエティのメンバーには、文系の英語系学科に所属している研究者が多いという特徴があります。ただし、このソサエティに属する日本人研究者はわずかで、文系の英語学科に所属する人にお会いしたことはありません。

ここで、Professional communication とは、米国の大学では必須になっている academic writing, college writing あるいは technical writing と題された内容を含めた分野になります。明文の書き方をも含む“伝わる”文章作成術、“伝わる”話し方、“伝わる”ホームページ作成術について研究しています。Professional communication を専門家は、欧米では製造業やソフトウェア企業のマニュアル作成部門などに就職します。

明文と労働生産性

私は、ヒデらのない明文は、組織の労働生産性を向上させると考えています。適切な明文を用いると、グループやチームのメンバー間での、意思疎通が円滑になり、多くの無駄を省くことが出来るはずです。例えば、大学で考えてみましょう。メーリングリストへ投稿するメールが明文であれば、送信者は再送メールで追加情報を投稿する必要はありません。受信者はメールの意味を問い合わせるメールを書いたり、送信者は文章について電話で回答したりすることも不要なはずです。つまり、クレーム自体

が減るわけですから、クレーム対応も減少します。結果として、本来の業務へ割く時間が増え、送受信者共に生産性が向上します。会議の資料も同様です。作成者が明文の思想を理解し、誰が読むのかを考えて、会議資料を作成すれば、事項の説明や経緯の説明で時間を使わず、会議時間が短くなるはず。大学全体として、会議時間短縮時間×参加者分の時間が生み出されます。ヒデら退治は重要なのです。

明文教育の提起

さて、ここ数年、プロ野球では読売巨人軍や北海道日本ハムが安定した成績を取っています。両チームに共通するのは、レギュラーを脅かす選手が、安定的にファーム（二軍や育成枠）から一軍へ提供される点です。両チームにも、誰が監督になっても変わらない、チームとしての指導マニュアル（おそらく明文で書かれています）が来ています。昨年躍進した楽天も、野村ノートと呼ばれるマニュアルがあります。明文は野球さえも強くするのです。

最後に、情報リテラシー教育は、その必要性を感じた大学から始まり、『教科情報』として高等学校へ導入されました。明文教育も、伝えることができなければ卒業や修了できないと自覚した大学生のいる大学から始めても良いかもしれません[1]。それを本学から始めれば十分な地域貢献ではないでしょうか。また、全学会議は多文化共生社会での意志決定を試すとても良いケースになると思います。

参考文献

- [1] 阿部圭一、『明文術 伝わる日本語の書きかた』、NTT 出版、2006.
- [2] ドナルド・A. ノーマン、『誰のためのデザイン?—認知科学者のデザイン原論』、新曜社、1990.
- [3] ドナルド・A. ノーマン、『テクノロジー・ウォッチング—ハイテク社会をフィールドワークする』、新曜社、1993.
- [4] 村上 春樹、『走ることに語るときに僕の語ること』、文藝春秋、2007.



先住民イヌピアトが「ウクピク」と呼ぶシロフクロウとともに、アラスカ州アンカレッジで開催された情報通信に関する国際会議のバンケット会場